The Rainbow：愛の理想を求めて

内藤歓修

I

若い頃の D.H. Lawrence の精神の主柱であった母 Lydia が 1910 年12月に死去すると，彼にとって世界は解体し，自我は無に帰してしまい，彼自身も死んだと同然となってしまった。死んだ母への思慕の情はその死後暫くの間益々強く燃え上がり，そのため今迄の多くの女性との関係は殆ど消滅していった。次の1911年という年は彼の自我の解体していった月日で，11月に至ってとうとう彼は再び肺炎にかかり，勤めていた学校を辞めざるを得なくなった。この病を養ってゆくうちに，母親の影響は次第に薄くなってゆくが，次の年にはそれから決定的に解放されることになる。

1912年 4 月の或る日，Lawrence はノッティンガム大学時代の恩師 Ernest Weekley 教授宅を訪れた。ドイツに留学して，当地とは関係の深い Weekley 教授に，どこかドイツの大学の英語教師の職を紹介してもらいたかったらしい。教授宅で夫人 Frieda と初めて会い，二人の心は急速に接近する(1)。この予期せぬ出会い，心の交流はその後も止まる所を知らず，熱い恋となって遂に二人は翌年の 5 月 4 日にはロンドンのチャリング・クロス駅で秘かに落合い，イギリス海峡を渡り，Frieda の故郷ドイツ，メッツへ向った。Lawrence には教職を求めての孤独な一人旅の筈が夫子ある人妻との逃避行，Frieda にとっては夫を捨て三人の子供をおいての悲愴な道行きとなってしまった。只ひたすらに「新しい人生」を求めての長い旅がここに始ったのである。二人はメッツで Frieda の家族に会ったが，彼女の父はこの結婚に反対であった。

その後，Lawrence は一人ラインランドをさまよい，途中 Frieda と落合い，彼女の姉 Else の斡旋によりミュンヘン近郊のイッキングに Max Weber の実弟 Alfred Weber 教授の家を借り，やっと二人だけの生活に落着いた。だがこのイッキングでの生活も二ケ月程で終止符が打たれ，二人はまた旅に出た。今度はアルプス越えの徒歩旅行を目指した。そしてアルプスを越えて最後に留ったのが，ガルダ湖の湖畔イタリア領ガルニャーノであった。ここにしばし休息の地を見つけ，1912年 9 月から翌年 3 月末迄腰を落着けた。この間アルプス旅行の印象などを織込んだ *Twilight in Italy* を執筆し，*Sons and Lovers* の最終稿も脱稿された。更に *The Rainbow* も

ここで3月迄には書き始められている。この作品は最初 *The Sisters* と呼ばれた一連の作品の前半であり，一時的に *The Wedding* と名付けられた後に，現在の名称[2]となったものである。George Duckworth 社の編集者で，Lawrence の文学上の後援者，擁護者であった Edward Garnett にこの頃宛てた手紙[3]に，本作品について最初の言及がある。

I've written rather more than half of a most fascinating (to me) novel. But nobody will ever dare to publish it, I feel I could knock my head against the wall. Yet I love and adore this new book. It's all crude as yet, like one of Tony's clumsy prehistorical beasts - most cumbersome and floundering - but I think it's great - so new, so really a stratum deeper than I think anybody has ever gone, in a novel. But there, you see, it's my latest. It is all analytical - quite unlike *Sons and Lovers*, not a bit visualised.

彼が執筆当初から *The Rainbow* には並々ならぬ熱意と気概を注ぎ込んで，ひとかたならぬ自信を持っていたことは，it's great - so new, so really a stratum deeper than I think anybody has ever gone, in a novel' という言葉からも伺えるのである。E. Garnett は文学上の数々の忠告を彼に与え，それによって Lawrence も，自分の作品を何度も改稿してきた。その E. Garnett に今回の作品は前作とは非常に異なり，今迄のような作品は残すことはあるまいと，彼への手紙[5]の中で言っている。

In a few days time I shall send you the first half of the Sisters - which I should rather call The Wedding Ring - to Duckworths. It is *very* different from *Sons and Lovers*: written in another language almost. I shall be sorry if you don't like it, but am prepared. - I shan't write in the same manner as *Sons and Lovers* again, I think: in that hard, violent style full of sensation and presentation. You must see what you think of the new style.

母の死，魂が消滅したような挫折感，苦悶の後の魂の回復，Frieda との出会い，真実の愛の探索へ向けての彼女との旅立ちなどの経験を経た Lawrence が到達しつつある，文学上の新しい手法をここに暗示している。

しかしこの作品に対する E. Garnett の評価は冷たかった。これに対して Lawrence は，後ろ盾を失って出版のルートが閉されることを恐れながらも，自己の文学的意図を吐露せざるを得なかった。この恐れ通り，彼が自らの主張を書き送ったことにより，彼の大事な友人であり，文学上のよき忠告者，出版者である E. Garnett との間に次第に越え難い溝が出来てしまい，とうとうその関係はほぼ断ち切られることになってしまった。それは1914年6月5日付の次のような手紙[6]の中に述べられている。

I don't agree with you about the Wedding Ring. You will find that in a while you will like the book as a whole. I don't think the psychology is wrong: it is only that I have a different attitude to my characters, and that necessitates a different attitude in you, which you are not as yet prepared to give. As for its being my *cleverness* which would pull the thing through - that sounds odd to me, for I don't think I am so very clever, in that way. I think the book is a bit futuristic - quite unconsciously so.....

You mustn't look in my novel for the old stable ego of the character. There is another ego, according to whose action the individual is unrecognisable, and passes through, as it were, allotropic states which it needs a deeper sense than any we've been used to exercise, to discover are states of the same single radically-unchanged element. (Like as diamond and coal are the same pure single element of carbon. The ordinary novel would trace the history of the diamond - but I say 'diamond, what! This is carbon.' And my diamond might be coal or soot, and my theme is carbon.)

You must not say my novel is shaky - It is not perfect, because I am not expert in what I want to do. But it is the real thing, say what you like. And I shall get my reception, if not now, then before long. Again I say, don't look for the development of the novel to follow the lines of certain characters; the characters fall into the form of some other rhythmic form, like when one draws a fiddle-bow across a fine tray delicately sanded, the sand takes lines unknown.

このダイアモンドの原素である炭素を描くことが自分の主題であるという主張は余りにも有名である。前三作と文学的視点に於いて変貌の著しい作者の創作態度がここによく示されており，尚且つこれからの彼の小説構成の骨格をなす思想となっているのである。"I shall get my reception, if not now, then before long." と彼が言う通り，現在ではこのような手法は何の抵抗もなく受入れられる自然なものであるが，当時の状況では，文学的洞察力の優れた E. Garnett をしても受入れられない小説形態であった。

文学的に大いなる変貌を遂げつつあった，この頃の Lawrence は実生活に於いても大きな変化に遭遇していた。ガルニャーノに1913年4月頃迄おり，その後イギリスに渡ったりヨーロッパ，特にドイツ，イタリア，スイスなどを巡って暮していたが，1914年5月に Frieda と Weekley との離婚が成立したので，二人は再度イギリスに渡り，7月13日弁護士 Gordon Campbell と John Middleton Murry を証人にして Katherine Mansfield らの臨席により Frieda と正式に結婚した。その後すぐにまたヨーロッパに渡る予定が7月の第一次世界大戦勃発により，暫くの間国内に留らまざるを得なかった。国内に禁足の間，彼は *The Rainbow* を断続的にも書き続け執筆開始から丸二年後の1915年3月2日にサセックスのグレタムで完成した[7]のである。このような状況下で書かれ，紆余曲折を経て *The Rainbow* は同年9月末日に出版された。だが Lawrence の意気込みとは裏腹に，早くも10月5日[8]には Robert Lynd に非難，攻撃されている。この酷評

を追いかけるようにして，11月には *The Rainbow* は発売禁止になってしまう。一般社会に於いて陰靡なものとしてひた隠しに隠されている性を，彼は生命の根源として認め，信じたために，そこに軋轢を生じ，社会は彼を認めることなく否定しようとした。しかし，彼はこの作品で男女の新しい愛の探索の過程に於ける重要な要素の一つとして，性を取り上げて真剣に取組んだのであって，徒に情欲を煽るために性を扱ったのではないのである。この社会の認識と作者の認識の間の大きなずれは，時代を先駆ける者の悲劇の一事件であったと言えるであろう。

II

前作 *The Sons and Lovers* を書き終えた Lawrence は，最早満されぬ何かを求めて，暗中模索する若き苦悩者ではなかった。Frieda との出会いの後，母の影響からも殆ど脱け出し，独自の哲学を持つようになっていた。彼女との駆落ちは，一般的道徳律からいえば，当然無分別の許されざるべき悪しき行為であった。しかし道徳面に於いても知的面に於いても，自分の生き方が袋小路に行き当ってしまっているという気持に捉えられていた Lawrence にとって，新生活の判侶としての Frieda との駆落ちは彼に新生と幸福とを与えてくれた。このような事件を下敷きにすればこそ，彼が非道徳的，反知性的哲学に向っても，それは自然の成行きであったろう(9)。

1913年1月，友人の Enrest Collings に宛てた手紙(10)の中に，Lawrence は自分の血と肉の宗教を説いている。

My great religion is a belief in the blood, the flesh, as being wiser than the intellect. We can go wrong in our minds. But what our blood feels and believes and says, is always true. The intellect is only a bit and a bridle. What do I care about knowledge. All I want is to answer to my blood, direct, without fribbling intervention of mind, or moral, or what not.

この哲学を彼は Frieda との生活の中で考えつき，*The Rainbow* でそれに血と肉を与え具象化しようとしているのである。

The Rainbow は元の題名が暗示するように，結婚とそれにまつわる男女の葛藤を描いた作品である。その内容は英国中部地方の田園を背景として，その地方の農場主 The Brangwens 三代に亙る物語である点では，一族の年代記小説という様式を持っているとも言える。The Brangwens の三代を代表する三組の男女が，結婚を通しての男女のあり方という，同一の永遠の情況に直面する構想は他に殆ど類を見ないものであろう。そして作者 Lawrence は人物の性格を描くのではなく，人物が立っている，それぞれの段階を描くことによって，これら三組の男女関係に於いて，文明に侵されることなく，生命の根源に根ざす，男女の真の結合関係の形態を探求しよ

うとしたのである。

Lawrence は先ずこの The Brangwens の人々の特徴を次のように述べている。

There was a look in the eyes of the Brangwens as if they were expecting something unknown, about which they were eager. They had that air of reaidness for what would come to them, a kind of surety, an expectancy, the look of an inheritor. (Chap. I)

The Brangwens の者達には，一様に「起るべきものを待ちかまえている表情」があったが，男女の間には大きな違いがあった。男達は自然と共に生き，自然を相手に農耕に励み，「大地と大空と獣と植物との交感」をよく知っていた。そして彼らの身体は常に熱い血液に漲り，太陽と真っ向から向かいあい，目くるめくばかりの生殖の本源を見つめていた。即ち男達の目は充満する創造の生命の内側に向けられ，それが分解されずに彼らの血管に注ぎ込まれていたのである。言わば "blood-intimacy"（血の交歓）を享受していたのである。

一方女達は「"blood-intimacy" のまどろみ」があることはあったが，彼女らはそれとは違うものを求めていた。農場の熱い盲目の生命の交流の外側，即ち"the spoken world beyond"（彼方で話される言葉の世界）を見つめていた。それは「秘密が解かれ，欲望が充たされる魔法の土地」であった。このように，The Brangwens の男女には「何か起るべきものを待ちかまえている」という共通点はあるにしても，その生活意識に於いては大きな相違点があるのである。

更に男達を取巻いている環境は，明らかに彼らと密接な相関関係を持っている。

But heaven and earth was teeming around them, and how should this cease? They felt the rush of the sap in spring, they knew the wave which cannot halt, but every year throws forward the seed to begetting, and, falling back, leaves the young-born on the earth. They knew the intercourse between heaven and earth, sunshine drawn into the breast and bowels, the rain sucked up in the daytime, nakedness that comes under the wind in autumn, showing the birds' nests no longer worth hiding. Their life and interrelations were such; feeling the pulse and body of the soil, that opened to their furrow for the grain, and became smooth and supple after their ploughing, and clung to their feet with a weight that pulled like desire, lying hard and unresponsive when the crops were to be shorn away. The young corn waved and was silken, and the lustre slid along the limbs of the men who saw it. They took the udder of the cows, the cows yielded milk and pulse against the hands of the men, the pulse of the blood of the teats of the cows beat into the pulse of the hands of the men. They mounted their horses, and held life between the grip of their knees, they harnessed their horses at the wagon, and, with hand on the bridle-rings, drew the heaving of the horses after their will. (ibid.)

自然と人間の交流を描く，生々とした生命力あふれる，この文章にも Lawrence の面目躍如たるものがある。男達は自然と一体となり，自然の創造活動に参加し，充足した生活を送っている。だが，この地方にも産業化の波は押し寄せて来ている。付近に炭坑が開発され，The Brangwens の The Marsh Farm に運河がつくられ，鉄道も敷かれた。彼らは小さな谷の底に閉込められ，新しく開けたイルキストンから閉め出されてしまった。The Brangwens の家からは，向うにぼんやりとけぶる町の丘が見えた。彼らは文明から守られていた。

だが，外の世界は農業中心から，急速に産業化された世界に移行しており，The Brangwens の生活にも機械文明の波がひたひたと押寄せて来，彼らはその大波に洗われる直前の，つかの間の平和に生きているかのようである。そしてこの社会変動は男性がひたっている感覚的，肉体的生活という生活意識が崩壊し，女性の抱く教育や知識を重視した生活意識が優位に立つことを暗示している。更にこの環境の変化は，根源的に見ると，The Brangwens の男達の "blood-intimacy" に対立する女達の "the spoken world" の拡大を示していよう。

このような時代になると，長い間 The Brangwens を支え，彼らの生活に威厳と調和を与えて来た，古くからの田園秩序は急速に消滅する危機に立たされることになった。それ故この秩序によっては最早内的自己を充分に支え切れないとぼんやりながらも気付くのは，The Brangwens の男達の本質を表わす "blood-intimacy" の具現者である，この物語の第一世代の Tom Brangwen であった。

The Marsh Farm の母なる大地と盲目的な，深い交感をしている男達にとって，彼らより広い視野を持つ女達は大きな力を持っていた。Tom の母は彼をグラマー・スクールにやるが，これは完全に失敗に終った。彼はやっと卒業し，ほうほうの体で "the spoken world" から逃げるようにして帰って来る。本能的に深い親近感を抱いている古い生活様式に戻ることが出来てほっとする。

Tom Brangwen was glad to get back to the farm, where he was in his own again. "I have got a turnip on my shoulders, let me stick to th' fallow," he said to his exasperated mother. He had too low an opinion of himself. But he went about at his work on the farm gladly enough, glad of the active labour and the smell of the land again, having youth and vigour and humour, and a comic wit, having the will and the power to forget his own shortcomings, finding himself violent with occasional rages, but usually on good terms with everybody and everything. (ibid.)

この新しい世界での生活には拒絶反応を起し，伝統的秩序に守られた生活のパタンに戻り満足している Tom ではあったが，半面心の或る部分では落着かず，痛みや不満を感じるのであった。ここで注目すべきは，興味の焦点を登場人物と彼ら相互の関係に於ける心理的，内的生活に合せ

ていながら，Lawrence は内的要求と社会的，経済的な外的変化の関係を生き生きと描写していることである。既存の社会的関係の形態が変化したり，崩壊したりした場合，個人の内部に緊張や飢渇感がどのように生まれ，新しいより深い関係によって，それがどういやされ，解決されてゆくのかを作者は示すことが出来るのである。

こうした関係を Tom は Lydia Lensky との結婚によって達成することが出来る。彼は二十三歳の時，精神的主柱であった母を失い，次第に酒にひたるようになる。自分の個性を滅却しなければ生きられない気持にかられたのである。そのような状態の時，Tom は Lydia と出会い，無意識のうちに求めていたものが，この女性のなかに現実の姿をとって現われたのを知った。彼女は以前ポーランドの地主の娘で，現在はイギリスに亡命した医者の未亡人である。この時 Tom は二十八歳で Lydia は三十四歳。彼よりも六歳上で先夫との間に生れた子 Anna がいた。彼はノッティンガムの素朴な農夫であり，彼女は愛国運動にも参加したことのある知識階級の出身であるところに，両者の性格上の相異がある。この二人の人物説定には，Lawrence の父母の結婚 — 抗夫と知識階級出の女性との結婚—，更にノッティンガム生れの Lawrence 自身と外国人で子持ちの人妻である Frieda との結婚という二つの結婚がオーバーラップして見えると言っても，あながち穿った見方ではないかもしれない。

Lydia は夫が死去して以来，娘の Anna と共に外界から隔絶されたような生活を送り，ノッティンガムの牧師館でも殆ど他人との接触がない。或る夜意を決して Tom は，花束を手に彼女の所に求婚に行く。そして彼女のいる台所の窓の外から，Tom は母子二人の姿を見る。

Looking through the window, he saw her seated in the rocking-chair with the child, already in its nightdress, sitting on her knee. The fair head with its wild, fierce hair was drooping towards the fire-warmth, which reflected on the bright cheeks and clear skin of the child, who seemed to be musing, almost like a grown-up person. The mother's face was dark and still, and he saw, with a pang, that she was away back in the life that had been. The child's hair gleamed like spun glass, her face was illuminated till it seemed like wax lit up from the inside. The wind boomed strongly. Mother and child sat motionless, silent, the child staring with vacant dark eyes into the fire, the mother looking into space. The little girl was almost asleep. It was her will which kept her eyes so wide. (ibid.)

あたりは真暗闇で，この台所の中だけが明るく，母子は光の中に浮び上って見えるのである。あたかも彼女らは外の世界から絶縁されたような存在に見える。母は暗く，静かな顔をして過去の生活の思い出に耽り，娘も何か物思いにひたっている。この情景は，あの光と陰の画家レンブラントの絵の印象をもって，視覚的に強く我々に迫って来るのである。

しかし Lydia 母子は明るい光の中にいるにもかかわらず，彼女らの目はうつろで宙をにらんでいる。まるで別の世界と交流しているかのようである。このような Lydia に Tom が求婚し

受入れられ抱擁した後も，二人の間には親密感が持続することがない。

They were such strangers, they must for ever be such strangers, that his passion was a clanging torment to him. Such intimacy of embrace, and such utter foreignness of contact! It was unbearable. He could not bear to be near her, and know the utter foreignness between them, know how entirely they were strangers to each other. He went out into the wind. Big holes were blown into the sky, the moon-light blew about. Sometimes a high moon, liquid-brilliant, scudded across a hollow space and took cover under electric, brown-iridescent cloud-edges. Then there was a blot of cloud, and shadow. Then somewhere in the night a radiance again, like a vapour. And all the sky was teeming and tearing along, a vast disorder of flying shapes and darkness and ragged fumes of light and a great brown circling halo, then the terror of a moon running liquid-brilliant into the open for a moment, hurting the eyes before she plunged under cover of cloud again. (ibid.)

何か目に見えない力のような風に吹き寄せられて，Lydia に求婚した Tom のこの時の感慨は，その風に吹かれた雲によって天に見え隠れする月を象徴として，彼らの将来の結婚生活を暗示しているようである。

この時の二人の他人同士という印象は，その後も殆ど変ることはなかったが，彼らには曲りなりにも性の充足の時はあった。

She was sure to come at last, and touch him. Then he burst into flame for her, and lost himself. They looked at each other, a deep laugh at the bottom of their eyes, and he went to take of her again, wholesale, mad to revel in the inexhaustible wealth of her, to bury himself in the depths of her in an inexhaustible exploration, she all the while revelling in that he revelled in her, tossed all her secrets aside and plunged to that which was secret to her as well, whilst she quivered with fear and the last anguish of delight. (Chap. II)

だが普段は二人の間には何か冷たいよそよそしいものが感じられ，Tom にとって Lydia は未知な神秘的存在となり，彼の欲情も一種の崇拝の念に変化してしまうのである。妊娠すると妻は更に夫の近づき難い存在となり，夫婦間の亀裂は一層大きくなってゆく。Tom にとって Lydia は，「大地を覆う，あの暗澹たる，重い大空のように，彼の上にのしかかり，彼を圧しつぶそうとする挽臼の上石」のようになってしまった。そこで Tom は Lydia の連れ子 Anna に愛の充足の場を求めるようになる。丁度これは *Sons and Lovers* の夫婦とその息子の関係の裏返しの立場をとっている。こういった充足感を Tom は家庭の中で妻と共に求めようと願っていたのである。

ところが作者は *The Rainbow* に於いては，この方面の探求は深くすることなく，やがて Tom

と Lydia の夫婦間に一種の均衡を成立させている。

The days went on as before, Brangwen went out to his work, his wife nursed her child and attended in some measure to the farm. They did not think of each other—why should they? Only when she touched him, he knew her instantly, that she was with him, near him, that she was the gateway and the way out, that she was beyond, and that he was travelling in her through the beyond. Whither?—What does it matter? He responded always. When she called, he answered, when he asked, her response came at once, or at length.

Anna's soul was put at peace between them. She looked from one to the other, and she saw them established to her safety, and she was free. She played between the pillar of fire and the pillar of cloud in confidence, having the assurance on her right hand and the assurance on her left. She was no longer called upon to uphold with her childish might the broken end of the arch. Her father and her mother now met to the span of the heavens, and she, the child, was free to play in the space beneath, between. (Chap. IV)

ここには確かに一種の愛の理想境が見えると言えよう。しかしそれは飽く迄，古い道徳律の支配するところの普通の夫婦像である。夫婦の間には必ずしも真の和合はなく，或る種の冷たいよそよそしさが漂い，一時的には炎の燃える時もあろうが，性は妊娠・出産・育児といった種族保存，更には家庭生活を営み続けてゆく上での両性の妥協の道具でしかない。肉体的・感覚的愛の一種の均衡状態があるのみであり，両性の自我の主張などは全くないのである。

次に登場する男女は，Lydia の連れ子 Anna Lensky と Tom の甥 William Brangwen である。Anna は成長するに従って気むずかしくなっていった。人々の中に入ると自分が小さくなって，堕落したように感じ，家の中では父母の強力なきずなを前にして寄りつけないものを感じていた。その頃，父親の甥の William がイルキストンで設計技師見習として働くようになり，家に出入りするようになる。William の話を聞いていると，Anna は自分が神秘の教会の中に入り込んだように感じ，彼の中に陽の照りつける外界から逃れる場所を見出すのである。二人は急速に接近する。母と違って Anna は最初から，William に積極的である。彼に抱きつきながら，"Will, I love you, I love you, Will, I love you." (Chap. IV) と身を裂くような声で，自らの愛を率直に告白するのである。彼女にとって，彼の肉体は「一切の生命の中枢」であり，彼の腕の中で「真実の中枢」に触れることが出来た。だが彼にとって彼女は「彼を燃え尽す炎」であり，その炎により彼は燃え尽き，「炎の無意識で暗い一つの通路」になってしまうのである。

結婚後も女性優位の図式は変らない。二人の生活は Anna のペースで送られるようになる。だが二人の間には徐々に性格や考え方の相異が明らかになって来る。密月の最中，教会に行った時，Anna は見せかけだけの教会に敵意を持ち、教会が彼女に善人になれと教えることに反撥した。一方 William にとって教会は抵抗し難い魅力を持っていたが教会の教理そのものは全く無

意味であった。彼が求めていたものは，大いなる感情の神秘感ともいうべき，ただ暗い名状し難い情緒であり，真実なものは，Anna と自分との結びつき，教会と自分との結びつきにあった。彼は自分自身のことはどうでもよかったのである。また彼の真の存在の意義は無限や絶対を自分の暗い情念の中で経験することにあった。

彼女の魂と自我とは，彼女の中では全く同一のものであったが，彼は自分の魂の存在を無視し更に否認しようとさえした。彼の魂は暗い非人間的な魂であった。このように，尽くWilliam が自分と対立する関係にあるのを見てとった Anna は，腹が立ち，いらだたしい気持にとらわれていった。或る日，昔から彼女が好きであった，小さなガラス窓に描かれている子羊—キリストの象徴—と夫が交霊しているのを見ると，遂に怒りの余り Anna は彼に突き当り，更に言いがかりをつけて，彼の交霊を阻止し，彼が恍惚状態に浸っているのを邪魔するという実力行使に出る。この後，彼は再び同じ恍惚境に至ることは出来ない。後にリンカン大聖堂でも，彼女は同じ行動をとる。ここに自分の強い自我を主張して，William を顧みない身勝手な Anna の性質が既に姿を現わしている。

その後も William と Anna は常に対立者同士であり，相補う存在とはなることはないのである。二人に於ける根本的な相異は，William が The Brangwens の "blood-intimacy" という生き方を血筋から伝統的に受継いでいるのに対し，Anna は "spoken world" に目をやる，中部地方の女達を代表している。彼は内に籠ってゆく内的生活を送ろうとしているのに，彼女は外へ，外へと目を向けてゆく。彼が知性を欠いた闇の存在，暗黒の力で，何か暗い分らないものであるのに対し，彼女は明るい陽の光，また激しい炎のようである。二人は相手を自分の側に引っぱり込もうと，激しい戦いをする。

Anna は自分を「宇宙の中心」と信じている強い自我心を持った女性である。度重なる葛藤，壮絶な戦いの後，Anna が William に勝利を収め征服する過程の詳細克明な分析が第六章の Anna Victrix（勝利者アナ）である。

Anna は知識というものを崇拝する強い気持を持っていた。肉体は必ず滅するが，知識に於いては，人間は永遠不滅であるという人間理知の全能を信じていた。ところが一方，William は理智などというものは一切無視しており，彼自身の暗い魂の欲求だけを追い求めていた。彼女はこれに我慢出来ない。そして二人の間に激しい戦いが起きるが，その姿は一家の家庭生活に於ける主導権争いという側面を露わにしている。

He asserted himself on his rights, he arrogated the old position of master of the house.
"You've a right to do as I want," he cried.
"Fool!" she answered. "Fool!"
"I'll let you know who's master," he cried.
"Fool!" she answered. "Fool! I've known my own father, who could put a dozen of you

in his pipe and push them down with his finger-end. Don't I know what a fool you are!"

He knew himself what a fool he was, and was flayed by the knowledge. Yet he went on trying to steer the ship of their dual life. He asserted his position as the captain of the ship. And captain and ship bored her. He wanted to loom important as master of one of the innumerable domestic craft that make up the great fleet of society. It seemed to her a ridiculous armada of tubs jostling in futility. She felt no belief in it. She jeered at him as master of the house, master of their dual life. And he was black with shame and rage. He knew, with shame, how her father had been a man without arrogating any authority.

He had gone on the wrong tack, and he felt it hard to give up the expedition. There was great surging and shame. Then he yielded. He had given up the master-of-the-house idea. (Chap. VI)

この上更に，Anna は夫に攻勢をかけてゆく。彼が彫り続けているアダムとイヴの木彫の，イヴがアダムに比べて余りにも小さいことを彼女は嘲笑して批判する。彼は腹を立ててその板を割って燃やしてしまう。

このように戦いは Anna に有利に転開してゆくのである。即ち，最初は William は Anna の攻撃に対して自分の自我を保持しようと彼女に対抗するが，段々彼女に屈服してゆくのである。彼が自己中心的であると感じると，彼女は我慢出来ずに，彼を自分の力の中に入れようとして，泣き落しにかかったり，肉体的魅力を以て誘惑したりする。William は Anna が彼女の自我だけに関心を持ち，彼の自我や本質に無関心なのに不満になり彼女から離れ，家庭から逃げ出そうとする。これを知った彼女は彼を引戻す。こうした葛藤の繰返しの後，William は妻 Anna の完全な所有物となり，妻に対する奉仕者と化してしまうのである。

Anna の勝利感は益々顕在化して来る。彼女は妊娠すると，誇らかな気持になり，奇妙な歓喜に浸り，"the Unknown"（見えない神），"the Creator"（創造主なる神）の前で，共に喜びを分かち合うものがいないので充足されない魂を充たすために，人知れず裸になって大きなお腹をして踊る。

And she had to dance in exultation beyond him. Because he was in the house, she had to dance before her Creator in exemption from the man. On a Saturday afternoon, when she had a fire in the bedroom, again she took off her things and danced, lifting her knees and her hands in a slow, rhythmic exulting. He was in the house, so her pride was fiercer. She would dance his nullification, she would dance to her unseen Lord. She was exalted over him, before the Lord.

She heard him coming up the stairs, and she flinched. She stood with the firelight on her ankles and feet, naked in the shadowy, late afternoon, fastening up her hair. He was startled. He stood in the doorway, his brows black and lowering.

"What are you doing? he said, gratingly. "You'll catch a cold."

And she lifted her hands and danced again, to annul him, the light glanced on her knees as she made her slow, fine movements down the far side of the room, across the firelight, He stood away near the door in blackness of shadow, watching, transfixed. And with slow, heavy movements she swayed backwards and forwards, like a full ear of corn, pale in the dusky afternoon, threading before the firelight, dancing his non-existence, dancing herself to the Lord, to exultation. (ibid.)

この時の William の忠告も，興奮に酔い，恍惚に浸っていた Anna には，"I can do as I like in my bedroom. Why do you interfere with me?" と一蹴されてしまう。これが彼女の幸わせの本質なのである。彼女の幸わせというのは，自分の自我は確保するが，外からの圧力や拘束を拒否した上での，自分だけの世界に於ける愛に満ちた幸福を達成することであった。

She wanted her own, old, sharp self, detached, detached, active but not absorbed, active for her own part, taking and giving, but never absorbed. Whereas he wanted this strange absorption with her, which still she resisted. (Chap. VII)

William の欲求は当然であった。既に彼女との戦いに敗北を喫してしまった彼は，彼女なしでは自分は "uncompleted" であり "uncreated on the darkness" である存在であるという恐れを抱いていたからである。しかも彼女が "complete in herself" であると彼は承知していたからである。Anna は Ursula を生むと，"Anna Victrix" となり真の勝利者となった。彼の敗北は決定的になったのである。

だが，こうして満足な生活を送っているように見える Anna にも，未だ幾分満たされない，何か期待する気持が残っていた。Pisgah の山の頂きから，幻の扉である虹が大空にアーチのようにかかっているのを見た。また冬には夜明けと日没を両足にした太陽の軌跡を，一日という空にかかる虹として見，そしてその虹に希望と約束を彼女は見た。しかし彼女は立ち止ったまま，旅に出ようとはしない。子供がどんどん生まれてゆくに従って，不満の影は姿を消していった。

だが Lawrence が男女両性の関係の場で探求したのは，自我の対立する闘争に於いて，Anna の勝利のようなどちらか一方の自我の勝利というのではなく，対立する自我の調和ということであり，そして彼はその調和が成就するのが性の理想的境地であるとした。これは宇宙の生命と一体になるようなものであった。William はこのような性の理想的境地をリンカン大聖堂を訪れた時に一度味わったのである。

Away from time, always outside of time! Between east and west, between dawn and sunset, the church lay like a seed in silence, dark before germination, silenced after death. Containing birth and death, potential with all the noise and transition of life, the cathedral

remained hushed, a great, involved seed, whereof the flower would be radiant life inconceivable, but whose beginning and whose end were the circle of silence. Spanned round with the rainbow, the jewelled gloom folded music upon silence, light upon darkness, fecundity upon death, as a seed folds leaf upon leaf and silence upon the root and the flower, hushing up the secret of all between its parts, the death out of which it fell, the life into which it has dropped, the immortality it involves, and the death it will embrace again.

Here inthe church, "before" and "after" were folded together, all was contained in oneness. Brangwen came to his consummation. (ibid)

彼にとって，この大聖堂は時間と空間を超越した，原型としての母，即ち人間が生まれ，帰ってゆく大地としての母の "the womb" であると感じられているのである。彼は今や忘我の境地にあった。

And there was no time nor life nor death, but only this, this timeless consummaton, where the thrust from earth met the thrust from earth and the arch was locked on the keystone of ecstasy. This was all, this was everything. Till he came to himself in the world below. Then again he gathered himself together, in transit, every jet of him strained and leaped, leaped clear into the darkness above, to the fecundity and the unique mystery, to the touch, the clasp, the consummation, the climax of eternity, the apex of the arch. (ibid.)

ここでは自我と自我との対立が均衡状態にあり，"the climax of eternity"（永遠の極地）に到達している。だが自我心が強く，目が絶えず外に向いている Anna は，大聖堂の外の大空の空間には無数の星が自由に旋回しており，その上には更に高い自由があることを知っていた。また祭壇の火は消えていて，神は最早その茂みの中では燃えていないことを感じた。そしてこういう冷静な気持と彼の恍惚状態を腹立たしく思う気持とから，彼女は彼の情熱をこめた大聖堂との交感を悪態をついてそこねてしまった。彼は幻滅に追い込まれてしまい，この打撃が彼のその後の生き方を決定付け，教会は彼にとってその絶対性を失ってしまう。心の中心を失った彼は Anna の「母系家長制」に奉仕し，支配者となる努力を放棄してしまう。教会内での恍惚状態を否定されたことにより，彼の全存在も否定され，彼はただ Anna の肉体的欲情に支配されて生きるのみで，「精神的優越も精神的支配」も失ってしまう。彼は尊厳も意義もなくして，子供と妻とに仕える，空虚な存在と化してしまったのである。

Lawrence は1915年に，*The Rainbow* と同時期に *The Crown*[11] という短い評論を書いている。ここで Lawrence は王冠の下に対立しているライオンと一角獣のイギリス王室の紋章を例えに出して，彼の考える真の男女の愛の姿のあるべきヴィジョンを提示している。即ち王冠が愛であり，この両者の互いに等しい力の闘争の上に王冠は支えられている。だが両者が仲直りしてしまえば，王冠は両者の上に落ちて来て打ち砕いてしまうし，また一方が勝って他を追払ってし

まえば，王冠はその勝利者の上に落ちて来て打ち砕いてしまう。一方の自我が他の自我を征服したり，互いに自己の自我を消滅させるところには，真の恋愛関係は成立しないと，Lawrence は考えたのである。例え一時的には愛の至福に浸り得ても，William と Anna の夫婦関係は作者の考え方からすると，妻の自我が夫の自我を征服してしまった以上失敗に終り，Anna は王冠を二人の上に落してしまったが故に，作者の愛の理念の破壊者となっているのである。この真の愛の探求は第三の世代の Skrebensky と Ursula の関係で更に深く試みられることになる。

Ursula が八歳頃の春の或る日，Tom Brangwen は一人ノッティンガムの市場に出掛ける。夕方から雨が降り出し，大雨となって思いもかけず出水騒ぎとなる。彼は夜十一時頃酒を飲み上気嫌で帰宅するが，自分の農場の馬車置小屋のところで洪水に足をとられて，そのまま濁流に流されて溺れ死んでしまう。この洪水は Tom Brangwen が耽溺する感覚的，肉体的生活を象徴しているのであろう。そして更にノアの洪水と結びつき，洪水が引いた後，神がノアに見せる虹を通して，虹の象徴につながってゆくものである。*The Rainbow* では主要人物が皆探し求める理想は，光と闇，見えるものと見えざるものの調和である虹によって象徴されている。Tom Brangwen が，溺れていたその肉感的生活を象徴する洪水に溺死したことは，Tom と Lydia の結婚生活の全部，また William と Anna の結婚生活の一部分が到達し得た夫婦関係の一応の願望達成が感覚的，肉体的層に留っている限り，それは極めて限定された達成であることを示している。こうして "blood-intimacy" の具現者 Tom Brangwen が溺死すると，あたりには「一種の漂泊感」がただようようになり，登場人物には近代人としての性格らしきものが現れ始める。Ursula は洪水の後に出る虹を求める人物として表舞台に表われて来るのである。

知的な女性である Ursula は，娘時代，宗教に関心を持った時，週日の "one [life] where the facts of daily life encompassed everything, being legion"（夥しい日常生活の俗事が，すべて一切を包んでしまっている生活）と日曜日に教会で与えられる "the other [life] wherein the facts of daily life were superseded by the eternal truth" (Chap. x)（日常生活の俗事が，永遠の真理によって，完全に置き替えられている生活）との間の亀裂に苦しむ。というのは彼女の考える宗教では，神は人間の女性達と通じ，キリストの復活は死に至るものではなく，生命によみがえるもの，即ち肉体の復活でなければならなかった。それ故，彼女はキリストに，ただ日曜日に教会だけで接するのみならず，日常彼が自分達の周囲に生き，その心臓の鼓動が聞こえる程近くに彼と接することを期待しているのである。このように Ursula は恵まれた知性を背景にした観念に於いても，実際の行動の面に於いても，確かな意識をもって積極的に肉体の価値を肯定しているのである。

神の子息が人間の娘の上に訪れてくれるよう夢想している Ursula に，人間の娘を見て美しいと思われた神の子のような Skrebensky という青年が姿を現わした。その時 Ursula は 16 歳，Skrebensky は21歳。彼は Lydia の遠縁にあたり，陸軍工科隊の将校であった。二人は接近しや

がて壮絶な自我の戦いに突入してゆく。

Ursula and Anton Skrebensky walked along the ridge of the canal between. The berries on the hedges were crimson and bright red, above the leaves. The glow of evening and the wheeling of the solitary pee-wit and the faint cry of the birds came to meet the shuffling noise of the pits, the dark, fuming stress of the town opposite, and they two walked the blue strip of water-way, the ribbon of sky between. (Chap XI)

母なる大地と機械文明の世界を分ける，一筋の青い水路を二人は歩いている。この二つの対立する概念を代表する二人が，その接線を歩いている情景はこれからの激しい戦いを暗示しているようである。

Skrebensky に見られる強烈な自我心に心を捉えられた Ursula は，彼を自分自身のすべてをぶつけてゆくに足る男性と見てとった。彼が彼女の自我に応じることの出来る自我の所有者と考えたのである。Skrebensky と Ursula の恋愛は男女両方が強烈な自我を対立させてゆくところに成立してゆく。

It was a magnificent self-assertion on the part of both of them, he asserted himself before her, he felt himself infinitely male and infinitely irresistible, she asserted herself before him, she knew herself infinitely desirable, and hence infinitely strong. And after all, what could either of them get from such a passion but a sense of his or of her own maximum self, in contradistinction to all the rest of life? Wherein was something finite and sad, for the human soul at its maximum wants a sense of the infinite. (ibid)

自己の自我が相手の自我と対立し，ぶつかり合うことにより，そこに生じる極大限の自我の中に，Ursula は愛の至上の形式，即ち恋愛の窮極の姿を見ようとした。そしてここに彼女は Skrebensky と，自己の自我が相手の自我と同時に拡大してゆく状況，即ち男女両方の自我が無限に拡大され，互いに牽引し合う星と星との間のように，均衡を保っているという恋愛の理想的な境地に近いものを一時的にも味わうことが出来た。だが実際にこの理想的な境地を味わうとすぐに，極大限に於ける魂は無限感を失うという，人間のもつ限定された悲しみも感じているのである。

飽くことのない自我の拡大を求めるものが衝突しなければならない人間の限界が，正にここに存在したのである。こういう状況に至ると，自我拡大の喜びは消え去り，両方共あせりあがき，均衡を失って，一方の敗北そして一方の他方による征服という結果となる。Skrebensky も Ursula に征服されることになるのである。

身内の者の結婚の祝宴で，園遊舞踊会がありダンスが終った後，月の光の中を二人は干し草畑

に行く。そこで月の光が暗闇を滅するように，Ursula は Skrebensky を消耗し切った存在としてしまう。

And timorously, his hands went over her, over the salt, compact brilliance of her body. If he could but have her how he would enjoy her! If he could but net her brilliant, cold, salt-burning body in the soft iron of his own hands, net her, capture her, hold her down, how madly he would enjoy her. He strove subtly, but with all his energy, to enclose her, to have her, And always she was burning and brilliant and hard as salt, and deadly. Yet obstinately, all his flesh burning and corroding, as if he were invaded by some consuming, scathing poison, still he persisted, thinking at last he might overcome her. Even, in his frenzy, he sought for her mouth with his mouth, though it was like putting his face into some awful death. She yielded to him, and he pressed himself upon her in extremity, his soul groaning over and over :

"Let me come—let me come."

She took him in the kiss, hard her kiss seized upon him, hard and fierce and burning corrosive as the moonlight. She seemed to be destroying him. He was reeling, summoning all his strength to keep his kiss upon her, to keep himself in the kiss.

But hard and fierce she had fastened upon him, cold as the moon and burning as a fierce salt. Till gradually his warm, soft iron yielded, yielded, and she was there fierce, corrosive, seething with his destruction, seething like some cruel, corrosive salt around the last substance of his being, destroying him, destroying him in the kiss. And her soul crystallised with triumph, and his soul was dissolved with agony and annihilation. So she held him there, the victim, consumed, annihilated. She had triumphed : he was not any more. (ibid)

Ursula の攻撃の前に，魂はいじけ，肉体は何か満されないものを感じて，彼は彼女の征服しようという力に極力対抗しようと，反対に攻撃をしかけるが，このような激しい闘争の末，Skrebensky は敗北し空虚な存在に堕してしまうのである。この後の彼は心は空虚となり，彼女の求めにも表面だけしか応じることが出来なくなってしまった。それに対して彼女の魂も空虚でしかなかった。Ursula に征服されてしまった Skrebensky は，最早彼女にとって何の意味もない。

Skrebensky が南阿戦争に従事して，イギリスを発った後 Ursula は自分の先生である Winifred Inger と親しさを増す。だが彼女は同性愛者で Ursula と，暗い夜，裸のまま抱き合ったりする。Ursula はこのような接触に嘔吐感を催す。叔父の Tom に彼女を引き合わせて彼女から去る。Tom も Winifred も現代の機械文明という病魔に蝕まれてしまっており，世界が完全に無にされ廃墟の中で退屈な生活を送っている。そこにあるのは不毛な死の気分であり，荒涼とした幻影のような雰囲気である。彼らの主人は機械であり，機械への奉仕の中でだけ人間感情という障害と堕落とから解放されるのだと考えていた。このような倒錯の世界に生きている彼らは，倒錯を

倒錯として認識し裁断する内的基準を喪失してしまっている。この二人は Ursula の抱いている理想の正反対の側に立つ人物，アンチ・テーゼとして描かれている。

大学に入学する前に，Ursula はブリンズリー・ストリートの St Philips 校という小学校に勤めることになる。外の，もっと大きな世界，活動の世界，男の作った世界の中に飛び込んだのである。ここでは教育は個性を伸ばし，生徒の自由を尊重してゆくものではなく，クラスを秩序と厳格さで無色の形式の中に結晶させてしまうものであった。小学校に於ける非人間的教育に失望した後，大学に大きな期待をかけて彼女は入学した。しかし，知的進歩を信じていた彼女は，大学教育を熱心に求めていたが，大学の学問に見出したものはすべてまがいもので，うすっぺらなものであった。大学そのものも宗教的な隠棲所，純粋な学問の隠れ家などでは全くなく，骨董屋のようなものでしかなかった。Ursula が知的教育の場に大きな期待を抱きながら，次第に失望してゆく過程がここに描かれている。

Ursula は段々自由の実体と周囲との様子の有様に気付いてきた。

That which she was, positively, was dark and unrevealed, it could not come forth. It was like a seed buried in dry ash. This world in which she lived was like a circle lighted by a lamp. This lighted area, lit up by man's completest consciousness, she thought was all the world: that here all was disclosed for ever. Yet all the time, within the darkness she had been aware of points of light, like the eyes of wild beasts, gleaming, penetrating, vanishing. And her soul had acknowledged in a great heave of terror only the outer darkness. This inner circle of light in which she lived and moved, wherein the trains rushed and the factories ground out their machine-produce and the plants and the animals worked by the light of science and knowledge, suddenly it seemed like the area under an arc-lamp, wherein the moths and children played in the security of blinding light, not even knowing there was any darkness, because they stayed in the light.

But she could see the glimmer of dark movement just out of range, she saw the eyes of the wild beast gleaming from the darkness, watching the vanity of the camp fire and the sleepers.... (Chap. xv)

彼女の実体は暗黒であり，未開なもので表面に現われるものではなかった。彼が住んでいるこの世界は，言わば闇の中のアーク燈に照らされた領域であって，蛾や子供達が光の下で安心して遊んでいるが，その向うに暗黒が広がっていることに少しも気付いていないというようなものであった。だが彼女はその光の世界から闇の中に目を向け，闇に住む野獣がこちらをじっと見つめているのを見ることが出来たのである。

この頃，Ursula の大学最後の年，彼女の二十二歳の時，Skrebensky が六年振りに戻って来た。彼は以前から，見かけ上の無頓着さとは違って，実際は階級や軍人という職業の枠に閉込められており，枠の外を見ることの出来ない男であった。「最大多数の 最大幸福」の思想を固く信

じ，彼にとっては，集団としての最大多数者に最高善であるものが，そのまま個人にとっても最高善なのであった。それ故，人は国家を支え万人の最高善のために働らかなくてはならないと考えていた。そこでは個人は大きな社会の構造の一つのレンガであり，国家や全体が重要なのであった。そして現在の彼は支配階級の一人，彼女自身よりもくだらない文明を代表するお偉方の一人であることを Ursula は悟った。

それでも Ursula は Skrebensky の肉体を愛しており，依然として彼は彼女の恋人であった。二人はずっと愛し合っていたのである。恋の焔は燃えあがり，二人は一つに結ばれる。この時の境地は "into the pristine darkness of paradise, into the original immortality"（原始の暗黒の楽園，原始の不死へ）そして "the dark fields of immortality"（永遠不死の闇黒の楽園）へと入って行ったと語られる。しかしこれは長くは続かない。Skrebensky は Ursula と一緒にいると，一切の自己満足，一切の日常的自我が破壊されてしまうのである。一方 Ursula は彼と身体の接触をする度に，彼から得られなかったものを感じて，益々それへの欲求が強くなってゆくばかりであった。そして生命に燃えあがり飽くなき自我の高揚を求めるのであった。これを受けて立つ Skrebensky は既に殆ど Ursula に征服され虚脱した存在，自我を失った男となっており，対等に彼と闘う力はない。それで彼女と妥協のため結婚を考えるが，彼女は結婚などは機械的な社会慣習だと関心を持たない。「光の世界」の中に閉込り，「見える場所」の中から，暗い闇の中を見つめる勇気を持たず，安全に生きようとする臆病者である彼にとって，男女の恋愛を社会慣習化された幸わせな形，「結婚」で完結しようと思うのは当然なことである。このような状況で二人は最後の死闘を始めるのであった。インド行きの準備で大童であった八月の初旬に Skrebensky は，Ursula とリンカンシャ海岸のバンガローで催された大きなパーティに招ばれた。そこで或る月夜の晩，海岸の砂丘を二人で歩く。

Then there in the great flare of light, she clinched hold of him, hard, as if suddenly she had the strength of destruction, she fastened her arms round him and tightened him in her grip, whilst her mouth sought his in a herd, rending, ever-increasing kiss, till his body was powerless in her grip, his heart melted in fear from the fierce, beaked, harpy's kiss. The water washed again over their feet, but she took no notice. She seemed unaware, she seemed to be pressing in her beaked mouth till she had the heart of him. (ibid)

このすさまじい極限の自我の戦いは，亡我の状態に於いても，尚存在する闘争の意志を以て，二人のどちらかが敗北し去る迄続くのである。

The fight, the struggle for consummation was terrible. It lasted till it was agony to his soul, till he succumbed, till he gave way as if dead, lay with his face buried, partly in her hair, partly in the sand, motionless, as if he would be motionless now for ever, hidden away

in the dark, buried, only buried, he only wanted to be buried in the goodly darkness, only that, and no more.

He seemed to swoon. It was a long time before he came to himself. He was aware of an unusual motion of her breast. He looked up. Her face lay like an image in the moonlight, the eyes wide open, rigid. But out of the eyes, slowly, there rolled a tear, that glittered in the moonlight as it ran down her cheek.

He felt as if as the knife were being pushed into his already dead body. With head strained back, he watched, drawn tense, for some minutes, watched the unaltering, rigid face like metal in the moonlight, the fixed, unseeing eye, in which slowly the water gathered, shook with glittering moonlight, then surcharged, brimmed over and ran trickling, a tear with its burden of moonlight, into the darkness, to fall in the sand.

He drew gradually away as if afraid, drew away—she did not move. He glanced at her—she lay the same. Could he break away? He turned, saw the open foreshore, clear in front of him, and he plunged away, on and on, ever farther from the horrible figure that lay stretched in the moonlight on the sands with the tears gathering and travelling on the motionless, eternal face.

He felt, if ever he must see her again, his bones must be broken, his body crushed, obliterated for ever. And as yet, he had the love of his own living body. (ibid)

Ursula の相手を破壊するような接吻はすさまじかった。まるで鋭いくちばしを持つ怪鳥のような接吻は，彼をおびえすくませ，どんどん追いつめてゆく。完全燃焼を求めての二人の戦いは余りにも激しく，Skrebensky はとうとうそれを持堪えることが出来なくなり，只引き下がってゆくだけであった。結局彼は彼女との戦いに敗れたのである。Skrebensky も彼なりの自我は有していたが，The Brangwens の女性達に共通した，何かを求め何物かを期待する本性を強くうちに秘めた Ursula の激しい期待に応え，満足させる程の力は彼にはなかったのである。作者 Lawrence の考える愛の理想たる自我の対立，拡大，均衡の姿は，男女二つの自我が全く均等に対峙出来ない限り成立し得ないことを，Skrebensky と Ursula の愛の闘争は示している。二人の愛は実ることなく，結婚に至る前に破局を迎えてしまった。彼はかつて真に彼女の「真実」になり得たことは一度もなく，只彼女の激しい欲情のなかでのみ，彼女と一体になれたのであった。全く形而下的な，低い次元で二人は一致し得たのみで，極限の自我を以て愛の極限に至るという形而上的な高度な次元に於ける彼女の熱望は，彼とは叶えることが出来なかった。Skrebensky は Ursula の一方的な勝利のもとでは生きてゆけない。自我が破壊される恐怖で一杯になり，ひたすら彼女から逃げてゆくのである。

Skrebensky と別れた後，Ursula は妊娠していることを知る。この時，自我の均衡という理想的な愛の形式などどうでもいい，男性に肉体的に愛され，平和で豊かな日常の生活があればいい，そして現実性に埋れた生活をしている，子育て機械のような母親の生き方が正しいのだなど

と，一度は思ったりする。そこで結婚に同意する手紙を彼に送る。一時的であったにせよ，彼女の現実との妥協であった。

十月初旬の或る日の午後，Ursula は何か狂気じみた気持にかられて，雨のために薄暗くかすんだ森の中を歩いて行った。雨にびしょ濡れになって帰えろうと，牧場を横切って歩いていると，何かが近づいていることに気が付く。数頭の馬であった。

She knew the heaviness on her heart. It was the weight of the horses. But she would circumvent them. She would bear the weight steadily, and so escape. She would go straight on, and on, and be gone by.

Suddenly the weight deepened and her heart grew tense to bear it. Her breathing was laboured. But this weight also she could bear. She knew without looking that the horses were moving nearer. What were they? She felt the thud of their heavy hoofs on the ground. What was it that was drawing near her, what weight oppressing her heart? She did not know, she did not look....

But the horses had burst before her. In a sort of lightning of knowledge their movement travelled through her, the quiver and strain and thrust of their powerful flanks, as they burst before her and drew on, beyond.

She knew they had not gone, she knew they awaited her still. But she went on over the log bridge that their hoofs had churned and drummed, she went on, knowing things about them....

Their great haunches were smoothed and darkened with rain. But the darkness and wetness of rain could not put out the hard, urgent, massive fire that was locked within these flanks, never, never.

She went on, drawing near. She was aware of the great flash of hoofs, a bluish, iridescent flash surrounding a hollow of darkness. Large, large seemed the bluish, incandescent flash of the hoof-iron, large as a halo of lightning round the knotted darkness of the flanks. Like circles of lightning came the flash of hoofs from out of the powerful flanks....

She could feel them there in their huddled group all the while she hastened across the bare field. They were almost pathetic, now. Her will alone carried her, till, trembling, she climbed the fence under a leaning thorn tree that overhung the grass by the high-road. The use went from her, she sat on the fence leaning back against the trunk of the thorn tree, motionless. (Chap. XVI)

これは一体，現実の世界で，Ursula が遭遇したことなのだろうか，又は彼女の病的に弱った状況から生まれた幻想の世界の出来事なのであろうか。あるいは又，作者 Lawrence の異常な幻想が生み出した幻影であるのか。馬は無意識の象徴，闇からの使者である。この作品の多くの箇所に見られる暗闇に関するイメージは，ここに全て集約している。暗闇を秘めた馬の脇腹やひずめの閃光は，無意識の暗闇の中から出て来る光であり，人間心理の無意識の世界を象徴的に描い

たものと言えよう。そして Ursula が遭遇した馬は，彼女の日常的存在そのものを根底から否定し，且つ彼女を根源的な暗闇の世界へ導き入れようとする役割を果している。その上彼女がその馬から逃げおおすことに成功したのは，彼女は単なる生命的な暗闇の中に留ったままでいるのではなく，次には光の中に生まれる可能性を示しているのである。

彼女は馬の群れから逃れ，家に帰るとすぐ倒れてしまい，そしてうなされたように，二週間程苦痛に悶えながら床に就く。病いからの回復と共に，自分の進むべき方向をはっきり自覚するのである。それは「時間」の流れの中に，「永遠」の新しい認識を創造してゆく道である。その「永遠」の中にこそ，生命の神によって創造されたものが訪れる筈なのである。今こそ Ursula は Skrebensky のような男性でなく，生命の神の創造物たる男性を求めなければならないことを悟ったのである。

And the rainbow stood on the earth. She knew that the sordid people who crept hard-scaled and separate on the face of the world's corruption were living still, that the rainbow was arched in their blood and would quiver to life in their spirit, that they would cast off their horny covering of disintegration, that new, clean, naked bodies would issue to a new germination, to a new growth, rising to the light and the wind and the clean rain of heaven. She saw in the rainbow the earth's new architecture, the old, brittle corruption of houses and factories swept away, the world built up in a living fabric of Truth, fitting to the over-arching heaven. (ibid.)

精神的にも肉体的にも痛手を負った Ursula は，一人見上げる空に虹を見た。彼女が過去と訣別し，そして固い殻をかぶってはいまわり，世界の腐敗の表面に生きている人間に背を向けた時，虹がかかるのは，彼女の新しく目覚めた気持を祝福し，彼女の目指す未来は，彼女より強い自我を有し彼女をしっかりと迎え入れてくれる，新しい男性とめぐり会う未来を象徴しているように思えるのである。

註 1) 二人の出会いのことを後になって Frieda は次のように書いている。

I see him before me as he entered the house. A long thin figure, quick straight leg, light, sure movements. He seemed so obviously simple. Yet he arrested my attention. There was something more than met the eye. What kind of a bird was this?

そして間もなく，彼を愛していることを自覚する。

Suddenly I knew I loved him. He had touched anew tenderness in me. After that, things happened guickly. (Frieda Lawrence: *Not I, But The Wind* …: pp. 4-5)

2) Letter to Edward Garnett, 9 May 1914 (*The Cambridge Edition: The Letters of D.H. Lawrence*, vol. II, p. 173. 以下 *Letters* II と省略)

Frieda wants the novel to be called *The Rainbow*. とある。

3) Lettes to Edward Garnett, 11 March 1913 (*The Cambridge Edition: The Letters of D.H. Lawrencce*, vol. I, p. 526. 以下 *Letters* I と省略)

4) Letter to Arthur McLeod, 9 February 1914

I have begun my novel again - for about the seventh time. (*Letters* II, p. 146)

5) Letter to Edward Garnett, 30 December 1913 (*Letters* II, p. 132)

6) Letter to Edward Garnett, 5 June1914 (*Letters* II, pp. 182-184)

7) Letter to Viola Meynell, 2 March 1915

I have finished my *Rainbow*, bended it and set it firm. (*Letters* II, p. 299)

8) Mr. Lawrence's reputation must suffer from the publication of such a book as this. It is not chiefly that the book will offend the general sense of decency: many an indecent book is none the less fine literature by reason of its humanity, its imaginative intensity, or its humour. *The Rainbow*, though it contains intense pages, lacks these marks of good literature. It is mainly a prolix account of three generations of sexual crises in the Brangwen family. It is the book of a theory, not a book either of life or of art. (Robert Lynd in *Daily News*, 5 October 1915)

9) Hough, Graham, *The Dark Sun*, p. 55

10) Letter to Ernest Collings, 17 January 1913 (*Letters* I, p. 502)

11) Lawrence, D. H., *Phoenix* II, pp. 365-415

参考書誌

1. *The Rainbow: The Phoenix Edition of D. H. Lawrence*: William Heinemann: 1971
2. Lawrence, D. H.: *Phoenix* II: William Heinemann: 1968
3. Boulton, James T. (ed.): *The Cambridge Edition; The Letters of D. H. Lawrence*: vol. I 1901-13, vol. II 1913-16: Cambridge University Press: vol. I 1979, vol. II 1981
4. Huxley, Aldous (ed.): *The Letters of D. H. Lawrence*: William Heinemann: 1956
5. Moore, Harry T. (ed.): *The Collected Letters of D. H. Lawrence*, vol. I: William Heinemann: 1965
6. Aldington, Richard: *D. H. Lawrence; Portrait of a Genius But…*: Collier: 1967
7. Draper, R. P. (ed.): *D. H. Lawrence: The Critical Heritage*: Routledge & Kegan Paul: 1970
8. Holderness, Graham: *Who's who in D. H. Lawrence*: Hamish Hamilton: 1976
9. Hough, Graham: *The Dark Sun*: Gerald Duckworth: 1956
10. Lawrence, Frieda: *Not I, But Wind…*: Cedric Chivers: 1968
11. Leavis, F. R.: D. H. *Lawrence; Novelist*: Chatto & Windus: 1967
12. Moore, Harry T.: *The Life and Works of D. H. Lawrence*: George Allen & Unwin: 1951
13. Moore, Harry T.: *The Intelligent Heart*: Farrar, Straus and Young: 1954
14. Tiverton, William: *D. H. Lawrence and Human Existene*: Rockliff: 1951
15. 井上義夫：ロレンス：小沢書店：1983
16. 入江隆則：見者ロレンス：講談社：1974
17. 北沢滋久：D.H. ロレンス：墨水書房：1973
18. 倉持三郎（著訳）：D.H. ロレンス：英潮社：1977
19. 西村孝次（編）：ロレンス：研究社：1971
20. 羽矢謙一：D.H. ロレンスの世界：評論社：1978
21. 村岡　勇：D.H. ロレンス：研究社：1970
22. 森　晴秀：ロレンスの舞台：山口書店：1978
23. 山川鴻三：思想の冒険：研究社：1974
24. D.H. ロレンス研究会（編）：ロレンス研究—虹—：朝日出版社：1977